

# アンデスを訪ねて

小村 幸二郎  
Kohjiro KOMURA

蕭蕭たるクスコの丘の頂に 時には勝誇る勝者の雄叫びのような そしてまた 打ちひしがれた敗者の魂さえも消え失せるような 声が渡る。 その声の主は ケンコ遺跡の岩場に腰をおろし 色鮮やかなポンチョとチューヨを身に纏ったケチュア族の老人であった。 たくましく陽焼けした顔 頑強そうな体軀 高い鼻 鋭さの中にも一抹の哀愁をおびた眼 小さな弦楽器を荒くれた手で爪弾きながら この老人は何かを語っている。 その姿と語りは 平家興亡の歴史を語る琵琶法師を想わせる

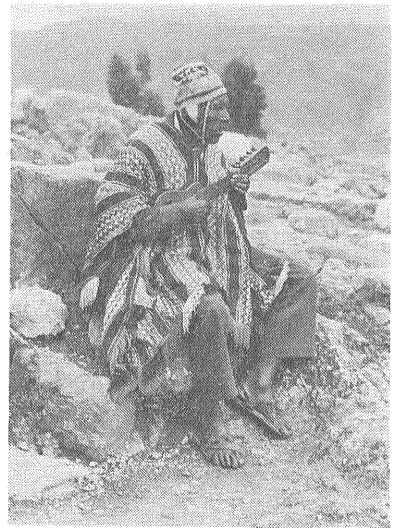
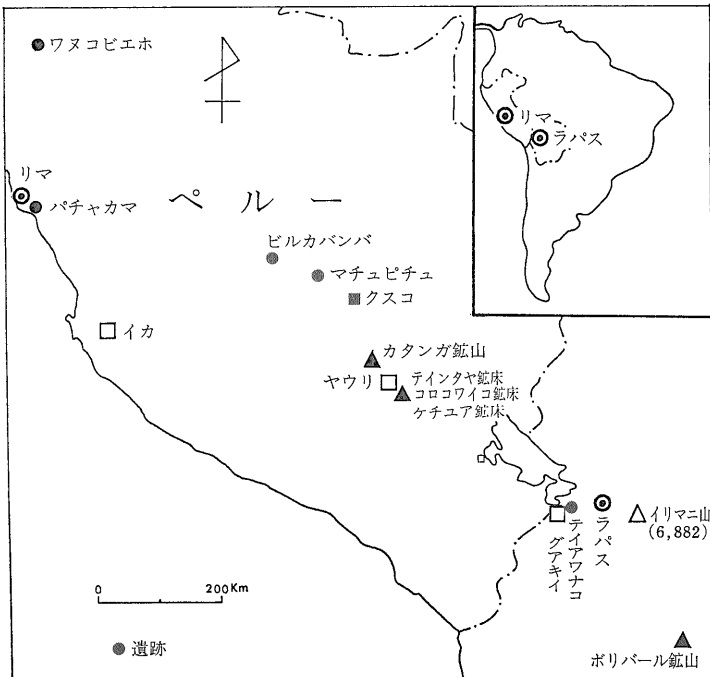
インカ帝国の首都として栄えたクスコは アンデス山脈の深い谷間を埋めていた。 多くの謎と怪奇を秘めたアンデス山脈と その中に眠るインカ帝国の足跡を求めて旅する人が必ずと言ってよいほど杖を休めるクスコの市街は 往時の姿をとどめて 幾多の攻防の歴史を秘めているとはとても思えないほど 静かなたたずまいである。 往時「神の汗」と呼ばれた金を求めた人々も このクスコで 一時の安らぎを得たであろうし そして今も 鉱物資源を求めてアンデス山脈に挑む人の中には

この由緒あるクスコで短かな休息を得た後 現地へ向う人が少なくない。

インカという言葉に 胸のときめきを覚えない人は少ないだろう。 この言葉が日本語に共通する何かをもっている故かもしれないが 重畳たる峻しい山 厳しくそして美しい自然 強烈でしかも独特の文化 広大な国土を巧みに統治した王と民 そして 余りにも短命にすぎたインカ帝国への憐愍の情に由来するのかもしれない。

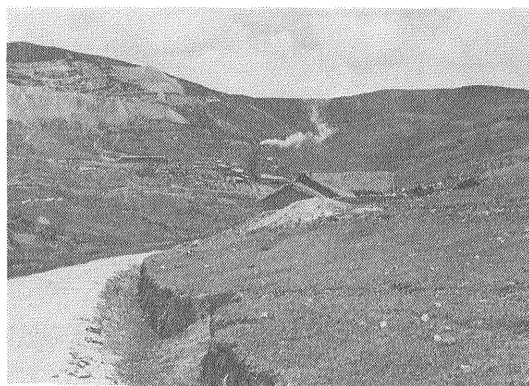
## クスコ南部の鉱床

太平洋岸のリマから海拔3,450メートルのクスコまでの距離はおよそ1,170キロメートルである。 この間 ジェット機なら50分だが 山岳地帯をぬって走るバスは26時間を要する。 かつてインカの王は リマで陸揚げされた魚を24時間後に食したということだが 一体どのようにして 何人がかりで運んだのだろうか。 比較的になだらかな山腹に 「VIVA EL PELU B.1.9」の



第2図 ケンコ遺跡で見たケチュア族の老人  
ウクレレ様の楽器を手に インカ帝国興亡の歴史を弾き語りしているらしかった。 ポンチョとチューヨの色彩があざやかである。

巨大な文字が見え いささか胸をさわがせるような狭い谷間の飛行場に到着した。空気が薄い故か 少々やら頭痛がはじまりそうである。かつて スイス・アルプスのユングフラウ・ヨッホを訪ずれた時は 空気の薄さを全く感じなかったが 同じような高地でも アンデス山脈では空気の濃度が一きわ低いのだろうか。空港建物の入口で あどけない顔の少女が 観光案内のパンフレットを売っていた。リマのホテルの売店では 600円だったこのパンフレットは ここでは 400円 しかも日本語版である。



第3図 Katanga 鉱山

海拔4200メートル付近に位置するこの鉱山ではスカルン型の銅鉱床が露天掘りされている。左上は露天掘、中央の煙の出ている建物は製錬所と選鉱場（左側）左端の建物は宿舎

クスコの中心街に向う途中 路上には 無数の大きな石が どこまでも転っていた。少々やら 肉の値上りに不満な人達の抵抗の表われらしい。リマから2日ばかりで廻送されたジープは 私達を乗せて 石ころだらけの道路を徐行しながら 20分ばかり後に 中心街にあるピラコチャ・ホテルに到着した。既に 虚脱感と頭痛が始まっている。

午前6時のクスコは肌寒く まだ 町は静かだが ホテルの食堂は マチュピチュ遺跡を訪ずれる観光客で賑わっている。6時間近くも寝たというのに 体調は元に戻っていない。

7時50分 ホテルを出て 舗装道路を南東方へ向った。快適な朝にちがいない筈なのに まだ抜け切れない虚脱感と軽い頭痛と睡気はどうしようもない。出発して間もなく睡りこんだのも束の間 ドアに頭をぶっつけたとたん目覚めてしまった。ホテルを出てからおよそ27キロメートル 舗装道路は砂利道に変わった。

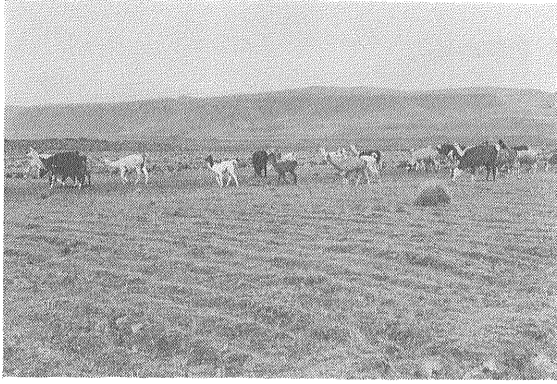
道路沿いに点在するささやかな部落 一きわ高い雪山 海拔4,700メートルの峠を越えて330キロメートル クスコを出発して7時間20分の後 Katanga 鉱山に到着した。娯楽もないこの辺境の地で鉱物資源開発に従事する4人の日本人技術者の顔は 全く予想外に晴ればれとしていた。

海拔4,000~4,600メートルのこの地域は ペルーの鉱床区々分において 西アンデス鉱床区の高原地域多金属鉱床帯に属する。この地域付近でやや北方へ彎曲して北西方へ延びるこの鉱床帯は Michiquillay Huanzala Cerro de Pasco などの鉱床を含み ペルーでは最も重要視されている鉱床帯である。

一夜明けて午前6時 体調は完全に回復し 爽やかに目覚めた。8時に出発し 30分後にはジープを降りた。これから目的地までは 馬に頼るしかない。比較的ゆるやかな山腹を 馬は黙々と登りはじめた。普段は馬に乗ることもないので 少々やら 一番おとなしい馬

をあてがってくれたらしい。体調も良く 空気の希薄さに馴れたせいかわゆるやかな坂道を歩いても気にならない。ゆるやかにうねる草原のような山腹を登り 幾つかの尾根を越えながら モンゾニ斑岩中に胚胎する鉛・亜鉛鉱脈 石灰岩と花崗閃緑岩との接触部に胚胎する鉛・亜鉛のスカルン型鉱床 巨大な石英脈やゴツサンを見て廻った。鉛・亜鉛鉱脈にささやかな探鉱跡があるのは 銀を目的としたものだろうか。今は完全にふさがっている小さな坑口も研も 長い時を経ているように思えた。荒々しいアンデス山脈の中にも 岩石があまり露出していない この付近のような女性的な姿態の部分もある。鋭どく切り立つ岩山の麓近くに広がるこの優しげな地形を見ているうちに 不図 若夫婦の姿を思い浮べた。

夕刻近く Katanga 鉱床の探掘現場を見た。白亜紀中期の石灰岩とこれに貫入するモンゾナイトとの接触部に胚胎するスカルン型銅鉱床である。露天掘の壁には 緑れん石やざくろ石からなるスカルン帯中に 孔雀石と珪孔雀石を主とする鉱石と これを切る花崗閃緑岩質の斑岩々脈が見えるが 酸化銅鉱を主とするこの鉱床は およそ50メートル深部で 硫化鉱物からなる鉱床に移り変っている。日没近く 小さな空洞に珪孔雀石の美しい結晶が密生しているのを手に入れて 現場を離れた。谷を隔てた南側の山腹では探鉱作業が行われているが 今は人影も全くない。古生界や中生界を貫いて花崗閃緑岩やモンゾナイトや花崗閃緑岩質斑岩が活動したこの地域には 未だ陽の目を見ぬ鉱床が 地下に眠っていることだろう。



第4図 クスコ南方 海拔4,200メートル付近の地形と  
リヤマ（首の長い動物）。

今日も アンデスの空は快晴である。 短かい滞在とはいへ 厳しい自然条件の下で疲れ果てた身も心も慰やすものとしていただけに見送ってくれる4人との別れはやはり切ない。「もうここでの生活にすっかり馴れました」と 晴れやかな笑顔で語ってくれた若者の去って行く者への思いやりが 一入身にしみる朝であった。

午前7時 Katanga 鉱山を後にした。 高い峠を越え平坦な地形が続く道の傍に 数頭のリヤマが居る。 長い首と小さな頭 愛くるしい目ざしを見ていると 何故か 心の安らぎさえ覚える。 リヤマを アンデス山中から海岸近くの低地へ 短時間で移動させると 空気の濃さに耐えきれずに 殆んどが死ぬと聞いたことがあるが 環境順化は 動物も人間も同じである。 そしてそれは 唯肉体的な面ばかりではなく 精神的な面でもいえることだろう。 美しいアンデスの山並みを背に生きる姿こそ リヤマの本当の姿のように思える。

商業的にも行政的にもこの地域の中心となっているヤウリに到着したのは Katanga 鉱山を出発して丁度2時間を過ぎた午前9時であった。 ゆるやかな坂道の両側に立並ぶ家は立派ではない。 人通りも無い静かな町の



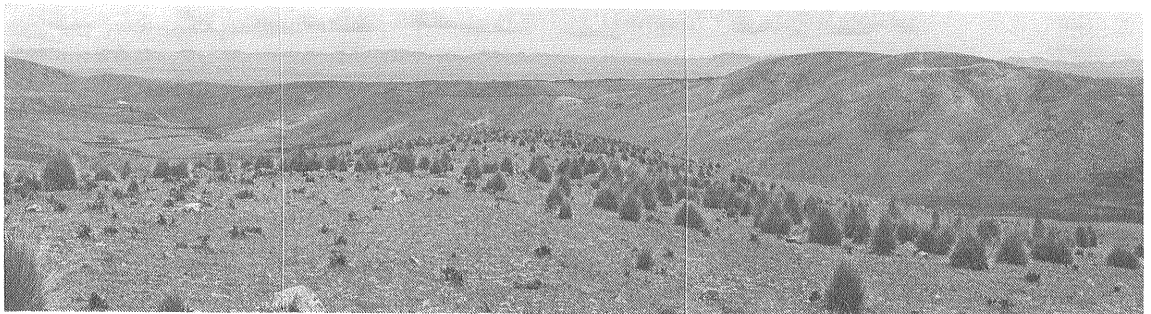
第5図 Quechua の山腹にみられるトレンチの跡  
この山地には ポーフイリーカッパー型の鉱床が眠っている。 山と山の間はパンパとよばれる。

一隅に 崩れ落ちた教会らしいものがある。 恐らく朽ち果てるままに放置されているのだろうが 低い家並の中に一きわ高い建物だけに 侘びしさを感じさせる。

なだらかな峠を過ぎて 道路は少し広くなった。 右手に見える白い屋根は 輝銅鉱や班銅鉱を採掘している Atalaya 鉱山の建物である。 ヤウリから50分ほど走って Quechua に到着した。 余り高くもない山の麓には 砂や礫からなる平らなパンパが広がっている。

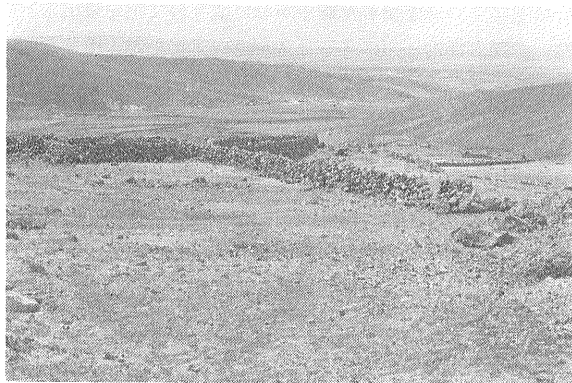
トレンチの跡の生々しい山腹を見て 小高い山頂に登ってみた。 パンパの尽きた北方の丘の北側には 開発を待つスカルン型の Tintaya 銅鉱床があり 東方には同じ型の Corocohuayco 鉱床がある。 この山の下にはポーフイリーカッパー型の銅鉱床の潜在が知られているが これが掘出されるのはいつだろうか。 山を下り Corocohuayco 鉱床地帯を通過して Tintaya に着いた。 現地事務所に立寄って見学許可をもらい 鉱床地区へ向かった。

数軒の家の囲りの低い石垣は 殆んど 酸化銅鉱物が付着するざくろ石・緑れん石スカルンで造られており 近くの探鉱跡は 丸で芝生を敷きつめたように 美しい



第6図 Corocohuayco 鉱床地区の地形とトレンチ（右方）左方の白い屋根はキャンプ。

緑におおわれていた。この酸化帯は地表から40メートルばかり続きこの付近から200メートルばかり深部までに硫化銅鉱物の鉱床が賦存するらしい。ゆるやかにうねる低い丘の下に眠るこの鉱床が開発されるようになれば今は佻しい部落も活況を呈することだろう。この鉱床の開発は外国に銅資源を依存する諸国の注目を浴びている。



第7図 Tintayaのキャンプ（前方の建物群）と鉱床のある丘（手前）。

石垣はほとんど孔雀石や珪孔雀石を含むスカルン。この鉱床の開発には幾つかの国が熱い視線を向けている。

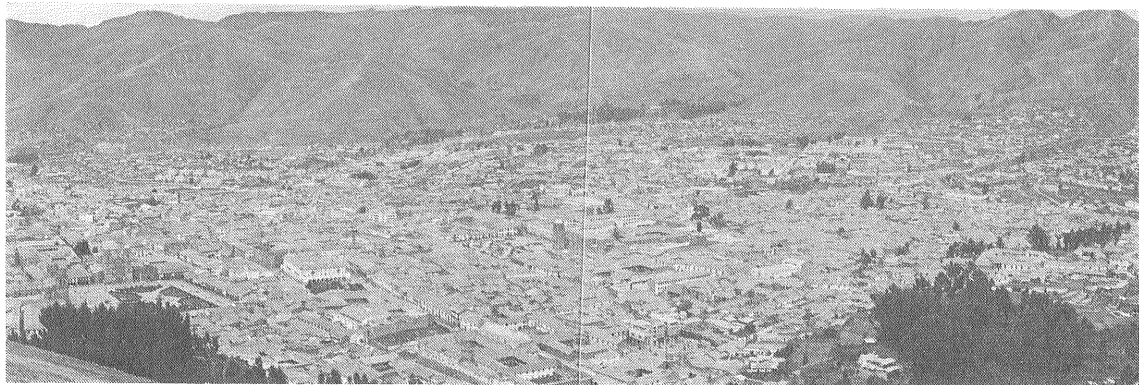
じっくりと腰を落着けて現地調査を行うゆとりはなく忙ただしく時は過ぎた。ヤウリを過ぎ地熱発電の可能性が検討されているというシンターの点在する地域を通りクスコを目指してひたすら走り続けた。深い谷に面する山腹の狭い段々畑には既に人影はない。陽は沈みとっぷりと暮れた。クスコからティティカカ湖畔の港町プノへ向う鉄道線路に沿う道路を走っているはずだがもうその線路も見えない。砂利道が舗装道路に変わりやがてクスコ市街に入った。ホテル着午後6時30分Katanga鉱山を出発して11時間30分のジープの旅ではあったが不思議に疲れなく体調は完璧であった。

### インカ帝国の首都クスコ

人口およそ30万人のクスコ市街はインカ帝国の都だっただけにどっしりと落着いたたたずまいを見せている。煉瓦色の屋根に白い壁の家並と狭い石畳の道メタリックな近代的建物は見当たらない。恐らく古い伝統と栄光の名残りをとどめるために建物の色彩などはかなり厳しく規制されているのだろう。由緒ある古い都を古いままに維持することは大変だろうが文化的遺産を可能な限りそのままの姿で後世に伝えようとする努力は素晴らしい。初めてクスコを訪れた人の多くは再訪を願うということだがそれは歴史的な遺産を持たないという理由だけではなく誇るべき遺産を持

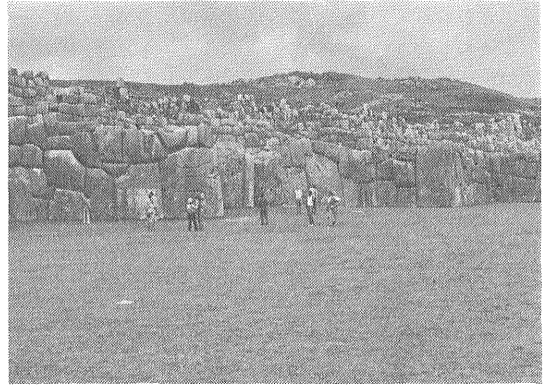
っていたとしてもその多くが近代化の片隅に取残されるかやがては撤去される運命にさらされているように見えがちなのは全く異なりクスコが未だに解明されぬ謎と怪奇を秘めたインカ帝国の首都としての歴史の重みをしみじみと感じさせるからであろう。

紀元前25世紀頃から13世紀の始め頃にかけて中央アンデスから太平洋岸に及ぶ地域には驚嘆すべき多様な文化が開花した。無土器文化に始まる先インカの文化はやがて初めて黄金を材料として見事な工芸品を創造したアンデス山地のチャビン文化を生み頭骸骨の変形で知られる南部海岸地帯のパラカス文化や色彩とモチーフの素晴らしさを特徴とするナスカ文化巨石を巧みに組合せた建造物を主とするアンデス山地のティアワナコ文化繊細なレース編で代表されるペルー中央地域のチャンカイ文化など現在の秀れた技術さえ遠く及ばな



第8図 クスコ市街の展望。

いほど多くの謎を秘めた輝やかな数々の文化を輩出した。考古学的研究はアンデス地域の文化がおおよそ2万年前までさかのぼることを示しているが上に述べたきらびやかな文化の誕生の基礎が出来上がるまでのおおよそ1万5,500年の間に初期の文化は一体どのように移り変っていったのだろうか。紀元前60世紀頃から50世紀頃にかけて野生動物の家畜化や植物の栽培化が手がけられ紀元前30世紀には藁草の繊維を材料とする織物が造られているが現在迎える文化の発祥から紀元前60世紀頃までの文化については未だに解き明かされない部分が余りにも多い。インカ帝国の治世に入るとこれらの文化を継承しながら巨石文化で象徴されるティアワナコ文化の発展がその中心になった感がある。華麗なイスラーム(サラセン)文化はイスラーム軍に征服された人々の自由への憧憬の一つの象徴として生れ育ったものであり巨大な建造物や墳墓などで代表される古代エジプト文化は当時のファラオ(王)の権力を基盤として栄えたと見做され中華人民共和国最大の建造物である長城も単的にいえばやはり統治者の権力が生み出した物であろう。インカ帝国の巨大な石積み建造物を見る時これらを含むインカの文化はやはり王の権力の一つの象徴のように思える。南米の原住民として一般に知られているインディオのルーツは明らかにエジプトとは全く異なる日本人と同じ蒙古人種でありまた文化の基盤から発展過程も両者の間には深い関係はみられそうにない。しかし何故半獣人や擬人化された鳥獣など両者の間に極めて似通った文化創造物があるのだろうか。同じ民族は共通の文化を持つことが多いものだが共通の文化を持つ者が同じ民族であるとは限らない。ティティカカ湖南岸に栄えたティア

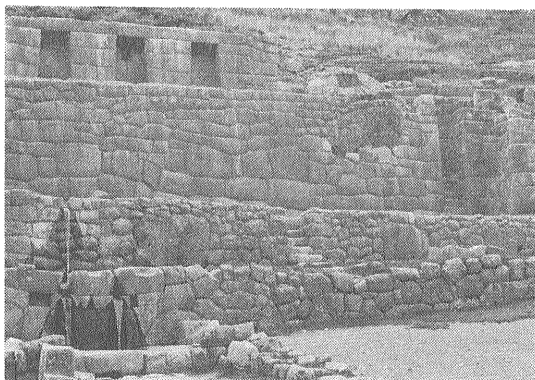


第9図 サクサイワマン城塞跡。  
クスコを見下す丘の上であり巨石文化の代表的建造物の一つである。どのような方法で巨大な石を磨き積重ねたのだろうか。

ワナコ文化がアイマラ族によって創造されこれと共通の文化を持つインカがアイマラ族でないことはその一つの例であろうしこれはまた例へ異民族であろうともまた互に隔絶された環境に生きようとも生きることにより良い糧となる文化は遂次琢磨されながら広く深く拡がってゆくことを示しているように思える。

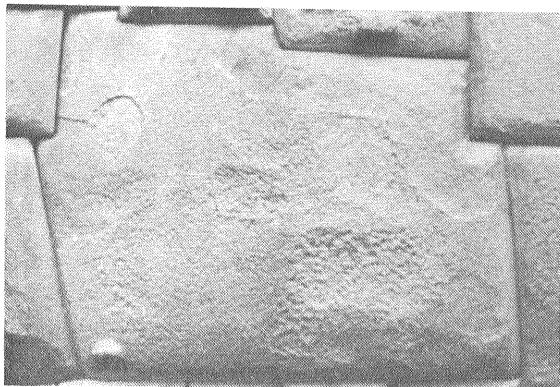
クスコからやや曲りくねった坂道を登りつめた所にサクサイワマン城塞跡がある。巨石文化を代表しているようなこの遺跡は首都クスコを防備するにふさわしく全体の規模といい石材の大きさといい実に壮大である。この城塞は14~15世紀に毎日3万人の労務者を使役しおおよそ80年をかけて建造されたものといわれているが一体このように大きな石をどのような方法で切り出し整形し運搬して積重ねたのだろうか。マチュピチュ遺跡の一隅に残る巨石の一部にタガネの跡のあるものがあるがこの城塞の石の切り出しにこの方法が用いられたとすればこの建造当ても現在も石の割り方は変わらない。一つ一つの石材の余りの大きさには息を呑むほど驚ろかされるが一方その繊細さにも驚嘆することが多い。エジプトのピラミッドや中華人民共和国の長城そして今日前に拡がる建造物はたとえその建造の目的や時代は異っていても当時の統治者の偉大な権力を誇示しているように見える。

若草の匂う広場は公式の行事が執り行われる場でありまた練兵場のような役割を果たしたのであろう。その美しい緑は延々と連なる無数の巨大な石の積重ねの堅さと冷たさを和らげている。



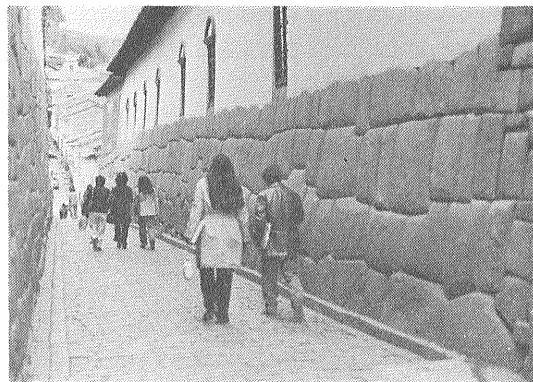
第10図 タンブーマチャイ遺跡。  
インカ皇帝の浴場と伝えられ水神信仰の場でもあったらしい。





第11図 謎めいた12角形の石

シンチ・ロッカ皇帝の12家族を表わすという。この石は クスコの宗教博物館（インカ・ロッカ皇帝の邸宅跡）の外壁にある。石の石との間は密着していて剃刀の刃さえ入らないが コンクリートのようなものは 使われていない。



第12図 クスコのアツンルミョク付近の風景。

狭くうねる石畳の道と石の壁は インカ時代のたたずまいを そのまま残している。

サクサイワマン城塞跡からやや離れた山腹に タンプーマチャイ遺跡がある。この遺跡はウヌ・カンチャとも呼ばれ インカ皇帝の浴場跡と伝えられている。常に清水が流れ出ていることから 水神信仰の場になっていたらしい。三角形を作る放水口と逆三角形に流れる水が気を引く。丸っこく独立した小さな丘の頂上に近いことからみて 地下水が絶えず湧出すとは思えないが もしも伝えられているように 清らかな水が絶えず流れ出ていたとすれば 何らかの方法で取水されたものが 水路を通して流れ出す仕組になっているのかもしれない。しかし その仕組は分らない。皇帝の浴場と聞けば 豪壮かつ美麗な浴場をもつ建物を想像しがちだが この浴場は余りにも質素である。この浴場で湯浴みした皇帝の人柄が このように質素な浴場を造らせたのか または 当時のインカ帝国の勢力がこの浴場で示される程度のものであったのか それは分らない。

この丘から少し離れた所に ケンコ遺跡がある。小高い丘の岩に刻み込まれた様々の模様らしきもの 地下の墓場 生贄の血でも流すために刻まれたようないわくありげな溝 広場を取囲むように造られている座席のような石積 緑の絨毯を敷きつめたような広場などから察すると 葬儀の場所であったようにも思われるが 一体ここでは何が行われたのだろうか。

夕暮近く ホテルのすぐ近くにあるアツン・ルミョクへ足を向けた。ここには 今は宗教博物館になっているインカ・ロツカ王の邸宅がある。この博物館の頑丈な扉は 既に ぴったりと閉ざされていた。石造建築技術の粋を見せているこの博物館の石壁の石は 奇妙に角

ばっていて一つとして同じ大きさ・形のものではなく 妙に謎めている。そうした石の一つに 世界で唯一と言われている12角形の一きわ大きな石がある。この石は インカの皇帝の中でも著名なシンチ・ロツカ皇帝の12家族を表わしていると伝えられているが 果して真実はどうだろうか。前に述べた遺跡でもそうだが この石壁でも 剃刀の刃さえ全く通らないほど 石と石とが密着しており それらを接着・固定するための物は全く見られない。全く隙間なくこのように石を積重ね或いは並べるためには 互に接する面が余程良く研磨されていなければならないはずだが 一体 どのような方法でこれらの大きな石は磨かれたのだろうか。

狭い道は石畳 そして 両側に続く壁も石造り 往時の人々は この堅い石畳を踏みならしながら 中央広場へ急いだのであろう。石畳の道とその両側の石壁 この組合せは 果して 当時の建造物のしきたりとして または それらの材料の入手を考慮して造られたものなのだろうか。古来 洋の東西を問わず 城下町の狭くそして直線的ではない道路は 外敵の侵入を阻止する意義を含めて 造られているものだが クスコの石畳の道と石壁は これに加えて 外敵防止の警報器の役目もっていたようにも思われる。試みに 作業靴で石畳を強く踏みつけてみると 予想通り そのかん高い音は反響した。迷路のような石畳の道を通して サント・ドミンゴ修道院へ出た。足音だけが略する夕暮の道を歩いていると インカ時代へ戻ったような錯覚さえ覚える。足音が異常なまでに響き渡るのは 空気の薄さにも原因があるのだろうか。総延長2万5,000キロメートルに及ぶインカの王道の情報家でもあったチャスキ（飛脚）は リマとクスコの間を2日で インカ帝国北端部の

エクアドルからクスコまで7日で走り抜けたということだが、その足音がこの石畳の道を鳴らす時、恐らく人々は耳を翳てたことだろう。

サント・ドミンゴ修道院の壮大な建物とその一角にある「太陽の宮殿」の石造建築の美しさは実に素晴らしい。インカとスペインは、スペインの一方的侵略に起因して憎しみ合いの歴史を綴ったことに違いはないが、その反面、この建築にみられるような美しいものも造っている。現在のクスコの家並の多くは、インカが築いた石積の土台の上に、スペインの統治時代に建造されたと言われているが、この「太陽の宮殿」を見つめると、何故かスペインに征服されたインカ帝国の文化の素晴らしさだけが胸をうつ。その素晴らしさの代表的なものの一つが有名なマチュピチュ遺跡である。

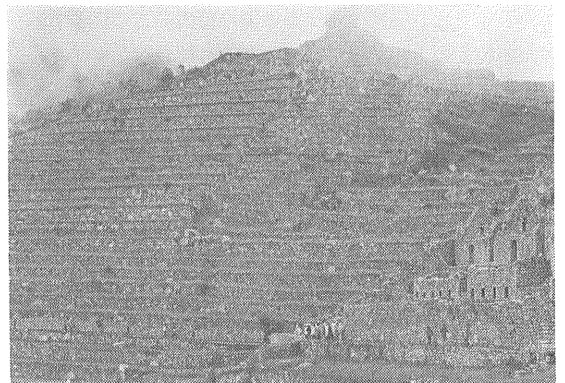
クスコからウルバンバ川に沿っておよそ113キロメートル、垂直に近い岩肌をもつ山の頂上に、千古の謎を秘めた空中都市として知られるこの遺跡がある。いつの時代に誰が建造し、いつの時代に住民が何処へ姿を消したか、今もって判らないこの城塞都市は、スペインの侵略



第13図 ウルバンバ川の深い谷に面する岩山とマチュピチュ遺跡のテラス状の畠。この岩山の頂上付近にも、住居跡やテラス状の畠があり幅70センチメートル前後の道が麓から頂上まで急峻な山腹に通じている。一般に知られているマチュピチュ遺跡は、この岩山と同じような山の頂上にあり、自動車はガードレールも全くない山腹のヘヤピンカーブの砂利道を走りどこまで登っても足下にウルバンバ川が見える。

者の目にとまることもなく、1911年7月、エール大学の考古学者によって発見されるまで、ひっそりと時を重ねていた。ここに住んでいた人は1万人とも2万人とも言われているが、一きわ高い岩山の頂上で、一体どのような方法で水を確保したのだろうか。リマからアメリカン・ハイウェイを400キロメートルばかり南へ行くと、イカという村がある。この村のある谷には、興味深い伝説がある。時の権力者パチャクティ皇帝が村の娘に思いを寄せたが、既に愛する若者と二世を誓っていたこの娘は、恐れることなくそれを拒んだ。その純な心と気高さに感動した皇帝は、その娘に「望みのものを与える」と誓った。娘は「村の人達がいつでも使える水を欲しい」と申し出た。そして皇帝は、即刻4万人の兵隊を動員して灌漑水路を造り、娘の望みをかなえたという。この伝説の真偽のほどは分らない。しかし、絶対的権力をもっていたであろうインカ帝国の皇帝が民を思う心と、水理技術が国家繁栄の重要な基盤の一つであることを如実に示すものとして、興味深い。マチュピチュの人々に潤いを与えた水が、どこからどのような方法で確保されたかは、今も謎とされているが、現在の土木技術者の想像をはるかに超える技術が駆使されたに違いないと信ずることも、インカの遺跡を訪ずれる人々の心に安らぎを与えるものの一つになるかもしれない。

クスコに夜が訪ずれた。深々と更ける町の片隅の薄明るい道傍で、インディオの娘や女房が、ポンチョや民芸品を商っている。肌寒さをこらえて、しばらくその商ないぶりを見つめていたが、店先に足を止める人は居なかった。寒そうな彼女達の商ないは何時頃まで続く



第14図 マチュピチュ遺跡の石造りの家とテラス状の畠。インカの家をおおいはじめた雨雲が、冬の気象の変化の激しさを暗示する。右下の廃墟にみられるように、切妻屋根と台形の入口はインカの典型的な建築様式である。

のだろうか。 古の都クスコに 物音は絶えた。

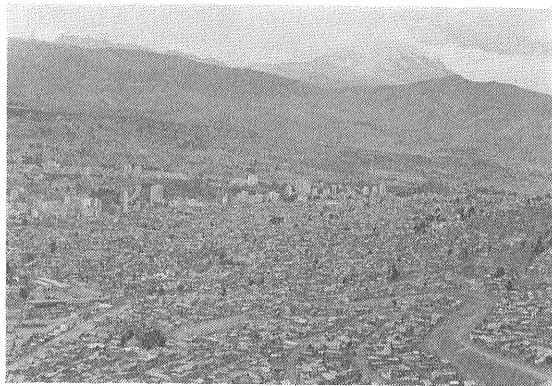
### Bolivar 鉱山を訪ねて

リマからボリビア共和国の玄関に当るラパスへ向う乗客は40人ほどであった。 飛び発ってすぐ快晴の太平洋上に出たボーイング727は 間もなく東へ大きく旋回して 厚い雲におおわれたアンデス山脈へ 機首を向けた。クスコへ向う途中のアンデス山脈上空では少々揺れたが今日のこのコースは気流の状態が良いのか 全く揺れない。 食事を終って 煙草を切らしているのに気が付き スチュワードに頼んでみたが「この機内では酒や煙草を販売しておりません」と 冷たい答が返ってきた。 国際線でも機内販売をしないフライトがあるらしい。 そのスチュワードは 操縦室の方へ行き 間もなく戻って来た。 「これをどうぞ」と 彼が差出した手には 紙巻煙草が5本あった。 有難いことだ。 天に突き刺さるような峯の頂上付近に ささやかな畠と一握りの家並が 雲の裂け目から見える。 厳しい自然環境の中で生きるインディオのつましい住居であろう。 それにしても何故 インディオは 世間から隔絶されたこのような土地に 生活の場を求めるのだろうか。 とかく便利な生活環境に馴れきっている者の目には 彼等の生活態様は 異様にさえ映る。

リマを出発してからおよそ1時間後 厚い雲が切れ 突然 目のさめるような美しい湖が 眼下に見えた。 この湖こそ 怪奇と未だ解き明かされぬ多くの謎を秘める インカ帝国の初代皇帝マンゴ・カパツクとその妃ママ・オクヨを誕生したといわれるティティカカ湖である。 海拔3,847メートル 世界の湖の中で最高地に位置する南米大陸第一のこの巨大な湖は 一体 どのようにして形成され また その水はどこから供給されているのだろうか。

海岸に近いリマを出て1時間20分の後に到着した ラパスの El Alto 空港は海拔4,070メートルの世界第一の高地にある。 タラップを降りたとたん まるで雲の上を歩いているように 力が抜けた。 空港待合室に酸素ボンベがずらりと並んでいることから察すると 機外へ出たとたん 気分が悪くなったり 卒倒する人が居るのだから。

ラパスはボリビア最大の都市であり 政治・経済等の中心地であるため 実質的には首都であるが 憲法上の首都はラパスの約800キロメートル南東に位置するスクレである。 ラパス市街は 空港付近から海拔3,500メートル付近まで まるで摺鉢の中に収まったように 一



第15図 ラパス市街とイリマニ山

ラパス市街は ラパス川がアルティプレーノを摺鉢状に侵蝕した部分にあり 海拔4,100メートル付近から3,500メートル付近まで 家が密集している。 空気の薄い高所は低層階級の空気の濃い低所は上層階級の居住区。

かたまりに軒を連ね 低所にゆくにつれて 公共の建物やホテル・高級住宅などが目につく。 恐らく このような市街のたたずまいは 空気の濃度と密接な関係を保っているのであろう。 言わば「山の手」は比較的に低層階級の「下町」は上層階級の生活圏ということになる。 空港から低地のホテルへ向う途中の自動車の中で「ラパスでは火事は発生しないし 稲妻は垂直に走る」と 聞かされたが この話は ラパスが空気の薄い高地に位置することを 良く表わしている。

頭痛と気分の悪さを我慢して 市内を見物することにした。 余り広くない市内はやたらと坂道が多く 少し急ぐと少々息切れがする。 メインストリートのサンタクルス通りから狭い坂道を登ると 古めかしい家が軒を連ねている。 恐らく インカ帝国時代の宿場町の面影を残しているのだから。 道傍で インディオの女性が雑貨を商っている。 お定まりの山高帽と何枚も重ね穿きしたスカート姿は アンデスの風物によくマッチする。 インディオは 女性に限って 何故帽子を愛用するのだろうか。 雨が降り出すと たとえ身体が濡れても 帽子だけはビニールにくるんで大事にするという。 一説によれば スペインの侵略当時 インディオの女性は帽子を被ることを強制されたということだが これが真実とすれば 帽子を売りつけることによって利潤を得るという目的もスペイン側にあったのかもしれない。 サンタクルス通りに続く7月16日通り(一般にはプラドと呼ばれている)が尽きた所に サンフランシスコ広場がある。 この広場に面するサンフランシスコ寺院は およそ360年の歴史を刻んで どっしりと建っている。 手



入れも余りなされていないのか 鐘楼のある円形の屋根をもつこの寺院の古めかしさは 一きわ目につく。 ゆっくりと見物するゆとりはなく ホテルへの道を引返した。 所々に建築中の高層のホテルが この町を訪ずれる人が年々増加していることを 物語っている。 夜のとぼりが迫るラパスは 人通りが多い割には静かである。 それにしても 日中にくらべて 夜の何と寒いことか。 初めてこの町を訪ずれてホテルに泊る旅人は 出来るだけ低い階の部屋を望み 極端な場合には ベッドに寝ずに床の上に寝るといふ。 高さが100メートル以上もあるホテルならいざ知らず せいぜい10数階建のホテルでは 最上階と1階とでは空気の濃さはそれほど異ならないと思えるのだが 少しでも楽な方法を選ぶのは 人間共通の習癖らしい。

味噌汁・焼魚・ウドンの昼食を済ませて サンタクルス通りを空港のある台地へ向う。 東アンデス山脈と西アンデス山脈とに挟まれて海拔3,500メートルから4,200メートルの高地に広がるこの台地は第三紀の堆積物からなり 国土面積のおよそ3分の1 (日本の面積とほぼ同じ面積) を占めて広がっている。 台地へ出て間もなく 雪におおわれた海拔6,480メートルのイリマニ山が見えた。 一きわ高い山は火山である。 完全に舗装された道路に沿って走る鉄道線路は 赤錆びて 佻しい。 しかし この線路は 4,700メートルの峠を越えてスクレへ通じ 山を越え深い谷を渡って ペルー ブラジル アルゼンティン チリへ続いていることからみれば この国にとっては 経済面と深く係わり合う動脈の一つであろう。 陽射しが弱まり 少し風が吹きはじめた。 空気が薄く乾燥している故か 無性に喉が乾く。 お茶



第16図 ボリバル鉱山  
海拔4,100メートル付近に位置する。 鉱脈型の錫・鉛・亜鉛鉱床を稼行しており Volatilization Method で精鉱を生産している。 左上は坑口前の研。

を飲み立寄ったパタカマヤの食堂には 先客は居なかった。 変り映えのしない風景を見ながら どこまでも平らな道を走ると つい睡くなってくる。 時折ドアに頭をぶっつけながら走るうち 夕闇が迫った。

ラパスから220キロメートル この国の錫鉱床の密集地帯の中心地となっているオルロに到着した。 岩肌をむき出しにした裏山には 一日900トンの鉱石を出鉱している San Jose鉱山 (錫・銀・鉛鉱床) があるが その様子を見る時間はない。 1,500人の従業員も多くは 恐らく 仕事を終えて家でくつろいでいるのだろう。 風は強まり もの凄い砂埃が町をすっぽりと包みはじめた。 とっぴりと暮れてしんと冷え込むオルロに 無気味なまでに風音は止まない。

一夜明けた午前7時 オルロから東へ向って出発する。 砂利道に身をゆすりながらの高地の自動車旅行も 馴れば それ程苦痛ではない。 広々とした池に見えるフラミンゴの群は 一向に動く気配さえ見せず 自動車のエンジンの響きと小石を跳ねる音とが 異常なまでに大きく聞こえる。 道はゆるやかに登り路面が荒れはじめて間もなく ショベルカーがのんびりと動いている平坦地が目に入った。 砂錫を採掘している Estalsa 鉱山である。 オルロを出発してからおよそ2時間の後 目的地に到着した。 ここは 海拔4,015mのアンテクエラ村である。

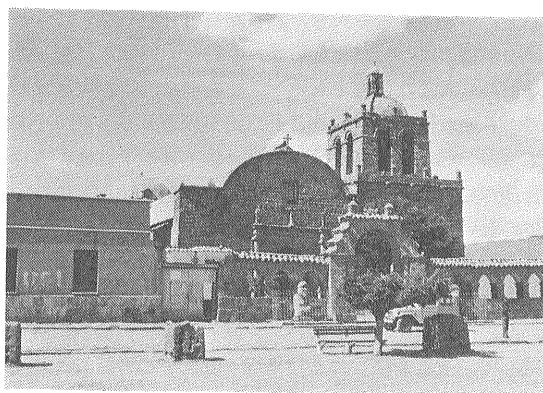
この付近には 粘板岩・頁岩・珪質砂岩等を主とするシルル紀の Llalagua 層 (厚さ1,100メートル) とシルル～デボン紀の Uncia 層 (厚さ2,000メートル) などが分布する。 これらの堆積物はアンデス山脈と同じ方向に褶曲し これとほぼ直交する N50~70°E 方向の断層で切断・転位されている。 この村にある Bolivar 鉱山の鉱床は これらの断層と これから派生された張力断層を生成の場とした鉱脈型鉱床であるが 主脈は錫に富んでフランケイトや毛鉱を伴ない 派生脈の鉱石の殆んどは鉄閃亜鉛鉱と黄鉄鉱からなるという特徴を示す。

鉱床の性状・分布と地質構造や火成活動の時期・性状との間に密接な関係があることはよく知られているがこの国の錫鉱床もこれをよく表わしている。 この国の既知錫鉱床は テイテイカカ湖の東部からアルゼンティンとの国境へかけて 東方へ彎曲して 幅80~180キロメートルの範囲内に分布し とくに 第三紀の火成活動が活発に行われた地域に卓越する。 オルロから南東方のポトシに至る地域は 鉱床の規模や数からみて その中心となっているが これらの鉱床については 中生代前期の花崗岩に伴なわれた鉱石成分が 第三紀の火山岩

の活動に伴われた鉱化溶液中に吸収されて生成されたと解釈されている。このような解釈は 南米大陸の太平洋岸に沿って分布するポーフィリー-銅型鉱床の品位が一般に高い理由として その生成以前に生成されていた銅鉱床が ポーフィリー-銅型鉱床の生成時期に溶解・吸収されたためとする解釈と共通していて興味深い。

200人の坑内夫によって採掘された2,000トン/月の粗鉱 (SnO<sub>2</sub> 3.2パーセント Zn 18パーセント pb 3パーセント Ag 300グラム/トン) の半分は貯鉱 半分は Volatilization Plant で処理され 品位22パーセントの錫精鉱と鉛精鉱・亜鉛精鉱として 半分はイギリス 半分はドイツに輸出されている。これらの生産物は 山元からテイテイカカ湖南岸のグアキ港までトラック ここで船積されてテイテイカカ湖上をペルーのプノ港へ 更に貨車に積み換えられて太平洋岸のマタラエ港へ輸送されているが これらの輸送料は一体どれほどになるのだろうか。海を持たない内陸国のきびしさを見る思いである ゆるやかな丘の斜面に 清らかな水が湧き出ている。この水は2,000人ばかりのこの鉱山部落の人々にとっては貴重である。ボーリング孔から偶然に湧出したということだが 山又山のアンデス山脈では 絶えることのない美味しい水も 貴重な資源の一つであろう。

オルロへの砂利道には 行き交う車も人影もない。澄み渡る青空に 山はあくまでも鋭くそして高く 一条の砂埃だけが 人の気配を感じさせる高原である。ラパスへの道へ出て間もなく 強い風が吹きはじめ 冷えこみはじめた。台地から見下ろすラパス市街には もう ぼつんぼつんと燈が灯っている。摺鉢状のラパスの地形は アマゾン河に注ぐベニ川の一支流であるラ



第18図 ティアワナコ遺跡の近くにある寺院  
入口の石像は ティアワナコ遺跡の出土品



第17図 ラパス北方15キロメートル付近から見るイリマニ山  
海拔6,480メートルのこの山では 2人の学者が常駐して 宇宙線の研究を行っている。手前の平地は海拔約4,000メートルの アルティプレーノで 農耕地になっている所もある。

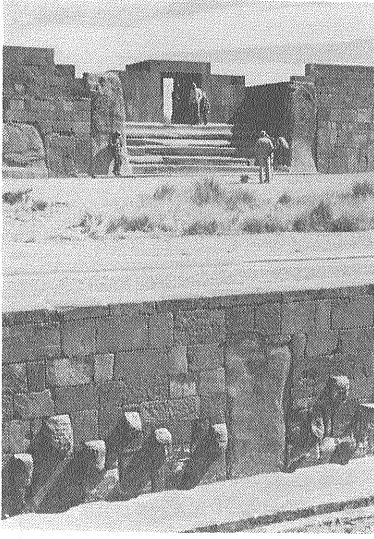
パス川が アルティプレーノの東縁部を侵蝕して形成されたものだが 自然の営みは われわれの想像以上に強大である。自然に逆らわず それと深く係わり合って生きる人々の姿に考えさせられることは多い。

### 巨石文化発祥の地ティアワナコ

空港から北への道はかなり荒れた砂利道である。ゆるやかにうねりながら ティテイカカ湖へ向って下る右手には 点在する農家と畑を隔てて イリマニ山が雪におおわれて 美しく輝やいている。ラパスから南へ向う道路添いの風景とは異って 農耕地がみられるのは長さ180キロメートル 幅60キロメートル 琵琶湖の12倍以上の面積をもつテイテイカカ湖が 気温を緩和させ耕作を可能にする程度の雨を降らすからだろう。ラパスを出発しておよそ40分後に 古めかしい町に着いた。ここはラハの町 ラパス発祥の地である。いわくありげな門を入った所に教会があった。かなり古いらしく 外観は所々いたんではいるが 広々とした内部では キリスト像の前に膝まづく人の姿があった。静かな落ち着いた町である。

ラハからほど近い道傍に 遺跡らしいものがある。誰一人居ない平地に発掘された遺跡 これこそ 巨石文化発祥の地として有名なティアワナコ遺跡であった。折あれば一目見たいと願っていたこの遺跡は ティテイカカ湖南岸近くにあるとは知っていたが ラパスからこれほど近くにこんな状態であるとは想像もしなかった。

長さ1,000メートル 幅450メートルにおよぶこの巨大



第19図 ティアワナコ遺跡の半地下神殿の床と釘状人頭彫刻  
この半地下神殿は「カラササヤ広場」の一部にある。動物の顔は別として アラビア人 中国人 いわゆる白人など 様々な顔の彫刻は 全くの想像では難かしいと思われるが 当時の彫刻家は これらの人種に接したことがあるのだろうか。

な遺跡は 未だその全貌を現わしてはいない。半地下の神殿の壁には 無数の首像が刻みこまれている。東洋人の顔 アラビア人らしい顔 そして いわゆる白人らしい顔 これら様々な顔は 想像だけで彫れるものではなさそうだが この遺跡の建造当時 既にモデルとな



第12図 ティアワナコ遺跡の石像



第20図 神殿都市ティアワナコ遺跡の「カラササヤ広場」と「太陽の門」

135m×130mのカラササヤ広場には 一定間隔で立つ高さ3メートル前後の巨石と巨石の間に切り石を詰めて造った 一種の入れ子積の基壇がある。目地土を使用しないこのティアワナコの空石積は 最古のものだと推定されている。

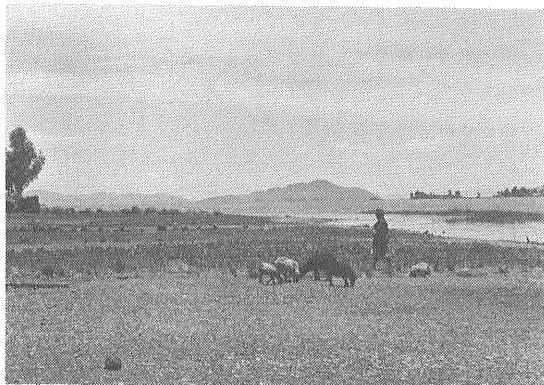
るべき様々な人種がこの地域に居たのだろうか。階段を登り 広場を横ぎった所に 有名な「太陽の門」があった。長さ3.75メートル 幅3メートルの安山岩の一枚岩で造られている門の中央上部には 鋭どく彫りこまれた四角な顔のピラコチャ神の像があり その下には 錫杖を手にした神官らしい像が 王へ向って 右側と左側にそれぞれ 3段8列に彫りこまれている。深く彫りこまれた力強いこのような彫刻は クスコをはじめ他の遺跡では殆んどみられない。紀元前後頃 から紀元600年頃まで栄え 700年頃から派生・移動しはじめたティアワナコ文化は それからおよそ300年の後にはアンデス全域に広まっているが この間に少しづつ彫刻される物も彫刻の技法も美的感覚も移り変わったのかもしれない。

いつまで見ても飽きない「太陽の門」の右側に 右上から左下へ走る大きな割目がある。一見 ごく普通の割目のようには見えるが これは 1908年に起った地震の 大きな傷跡である。この門は この大きな割目から崩れ落ちたということだが 創造神ピラコチャの威信のおかげか または ピラコチャ神の下に仕える神官達の心が天に通じたのか 美しい彫刻は殆んど傷ついていない。

1個で100トン以上もありそうな石もあり 将に 巨石文化の粋を見る思いがするこの遺跡でも 巨石と巨石の間には 全く隙間がない。巨石を鏡肌のように磨きそして それを積重ねる技術は 既に この巨石文化発祥の地で完成していたことを これらの石積は物語っている。そしてそれは 栄華を極めたインカ帝国時代を

はるかに過ぎた現在も 南米各地で 生活の場の建造に 受継がれている。不毛の地と目されていたボリビア北部で この地を 農耕に適する地と見定めた古代の人の 慧眼は どのようにして培われたのだろうか。余りにも美しく力強い「太陽の門」に象徴されるこの遺跡を目のあたりにする時 リヤマやアルパカを飼い 寒冷地に強い馬鈴薯などを育て ピラコチャ神に詣でる人々の平和なたたずまいが思い出される。紀元前後から栄えて 現在なお生きつぎけるティエワナコ文化 その繁栄の基礎は紀元前5世紀までさかのぼるといふ。

ティエワナコ湖の水面は静かであった。水深213メートルのこの淡水湖は アンデス山脈の雪溶けの冷たい水を集めて 美しい風景を見せている。この湖にはインカの伝説を残す「太陽の島」や「月の島」をはじめ多くの島が点在し また 湖畔近くには 先に述べたティエワナコ遺跡をはじめプノ ワタハタ ポマタ コパカバナなど 多くの史跡があり この国やペルーを旅する人の多くが訪ずれる。湖畔の道は 相変らず 砂利道である。点在する村は静まり 数頭のリヤマが のんびりと草を食んでいる。遠い昔 この湖の水は 轟音を立ててラパス峡谷を刻み 気も遠くなるような距離をアマゾン盆地へ流れていた。現在のアルティプラノは その頃 水におおわれ 現在さえも 8,280平方キロメートルの面積をもつティエワナコ湖は 壮大な景観を呈していたことだろう。時を経 相対的な山岳地帯の隆起は この壮大な湖を 片隅に追いやってしまった。ラパス峡谷への流れは絶え 周囲の隆起とともに乾燥化は進み インカにまつわる伝説を伝える「太陽の島」や「月の島」が誕生した。インカ帝国の初代皇帝マンゴ・カパツクと妃のママ・オクヨがティエワナコ湖で誕生したという伝説は 地殻変動による自然の姿の移り変りを表現しているようにも思える。



第22図 テイエワナコ湖南岸付近の風景

今はもう数少なくなってしまったのか テイエワナコ湖の風物詩に欠かせないトトラ葦の舟は湖上になく 岸辺の所々に舫ったまま朽ち果てて見えるその残骸が一きわ侘しい。人や家畜の食料ともなるトトラ葦を編んで造った浮島で 古くからの伝統と習慣を承継いで 生活するウロス族が居るはずだが 彼等の居住区は今走っている道路に添う湖岸付近ではないのか その独特の浮島も家も全く見当たらない。抜けるような青い空 白く輝やくアンデスの山々 豊かな緑に包まれた神秘的な湖 偉大な自然の造形は 訪ずれる旅人の目に こよなく美しい。しかし その美しさは 旅人の思いも及ばぬ厳しさと忍耐を そこに生きる人々に強いていることだろう。渡し舟が舫う棧橋から少し離れた岸辺で 幼子連れられたインディオの婦人が 洗濯に余念がない。顔付きから察すると ケチュア族かアイマラ族であろう。突然 物凄いい音を残して モーターボートが南へ走り去った。静まり返った水面を伝う波に 真紅の洗濯物が流れた。婦人の顔に 一瞬 不快感が走った。厳しい目付 それは インカ帝国を創設し 数々の繁栄をもたらして悲運の中に滅び去ったケチュア族か テイエワナコ文化を創造したアイマラ族の過去の栄光を胸に秘めて 細々と生きる人の顔のように見えた。

イリマニ山は 力なく西に傾きはじめた太陽の弱々しげな光を受けて 落着いた美しさを見せている。氷に閉ざされたこの岩山は寄り付き難い厳しい姿をしてはいるが この山の5,000メートル以上の一隅では 2人の学者が 宇宙線の研究に没頭している。氷に閉ざされた世界 そこには 待ち侘びた春が訪ずれようとも真夏がこよとも 心を和ませるものはない。恐らく このような厳しい条件の中で黙々と励む人が居ることを 多くの人は知らないだろう。華やかにスポット・ライトを浴びて弁説さわやかに何かを語る学者も居れば 人目につかずとも 懸命に励む学者や技術者も居る。そして多くの人の目は 前者にそそがれがちである。この美しく峻しい岩山も 壮大なティエワナコ湖が満々と水を湛えていた往時は 今の姿からは想像もつかない容貌を呈していたことだろう。悠久の時の流れの中にあつて 神々しいまでに美しいアンデスの山々と様々の湖は 一体 どのようにその姿を変えてゆくのであろうか。現在の地質学は 人間の生活の営みと深く係わり合う その将来の移り変る姿について 未だ言及してはいない。

### インカ帝国の興亡

昔い昔 クスコ南方の寒村を旅発った4人の兄弟が居

た。北を目指す旅の途中3人は病死し 残る1人は悲しみに打ちひしがれながらも 3人の魂に守護され導かれながら旅を続けた後 クスコに着いた。ここを定住の地と定めたこの若者は 天性の智謀を最大の武器として 次第に 住民を手なづけ ゆるぎない勢力を手中にして 遂に インカ帝国を創設するに至った。これはインカ帝国初代の皇帝となったマンゴ・カパックとインカ帝国創設を伝える伝説であるが 苦しい旅を続ける若者とこれを守る兄弟の魂とを中心とするこの伝説は東洋人がもつ伝説に似通っていて興味深い。

第9代皇帝パチャクティの治世下に 急速に成長したインカ帝国は 90万平方キロメートルに及ぶ国土を領有する大帝國となり 1471年から22年間にわたる第10代皇帝トパ・インカの治世に隆盛を極めたものの 元はと言えばクスコ付近の小さな勢力に過ぎなかったインカ帝国にとっては 被征服民族の反抗を押えることもままならぬほど広がった領土の保全是容易ではなく 更に帝位継承問題に係わる内部の混乱もあって 次第に完全に統一された国家としての体質は弱まりはじめた。この衰亡の兆しは植民地の確保と拡張を目指していたスペインの好餌となり 1532年 フランシスコ・ピサロとその盟友アルマグロが率いるスペイン軍の侵略戦争を誘発するに至った。時の皇帝アタワルパは捕えられ 多額の身代金によって一旦は赦放されたものの ピサロの手によって既に殺害されていた異母兄弟のワスカルを殺害して 帝位を強奪したという冤罪を理由に再び捕えられ 間もなく 刑場の露と消えた。美しい自然に育かれた人々のピサロの裏切り行為に対する怒りは激しくアタワルパ皇帝を慕う彼等は ピサロへの反抗の狼火を上げた。しかし 帝位継承を餌にマンゴ・インカを中心とするワスカル派を手なづけたピサロ軍に敗れ 1534年3月 ピサロの新生クスコ創設によって インカ帝国に対する侵略戦争は 一応 終末を迎えた。しかし 自国に対するスペイン軍侵略の最大の協力者であった筈のマンゴ・インカは インカ帝国皇帝としての権力の座を手中にすることなく送る日々が空しく皇帝の座への執着心の昂まりを押えきれず 遂に スペイン軍に対して戦を挑んだ。その戦の末に訪ずれたものは 敗戦 そして ビルカバンパへの逃避であった。岬々たる山並みを越え 谷を渡り 都落ちする武将の姿は哀れである。アマゾン河に注ぐウルバンパ川の支流であるビルカバンパ川の更に奥深いパンパコナ川とチョンタバンパ川の合流点に居を構えたマンゴ・インカは そそり立つ岩山と深い谷間を流れるせせらぎに 何を想いながらその生涯を閉じたのだろうか。朽ち果てて今は訪

ずれる人もいないこのインカ帝国終焉の地は ひっそりと 草木にすっぽりとおおわれて眠りつづけている。

インカ帝国のルーツは古い。しかし 初代皇帝マンゴ・カパックから第6代皇帝インカ・ロカまでは伝説上の人物であり 第7代皇帝ヤワル・ワカツクと第8代皇帝ビラコチャ・インカもクスコ地方にささやかな王国を統治するにすぎなかった。インカ帝国としての歴史を1438年に即位したパチャク皇帝が領土を拡張して帝国の基礎を確立してからアタワルパ皇帝が処刑された1533年までとみれば 驚異的な文化と権勢を誇ったインカ帝国は わずか95年で滅亡したことになる。

「太陽の渇き」を潤ほすために 戦を挑んで得た他国の捕虜を 生贄として神に捧げたアステカ人 可憐な乙女の胸を切り割いて取出した心臓を神への生贄として捧げ 黄金を「神の糞」と見做したマヤとは違って 太陽神への生贄として動物を捧げ 黄金を「神の汗」と見做したインカは 文化史上に不滅の名を残すこれら3王国の中では 最も平和的な国であったように思えるが 神官・貴族・平民の3階級に区分された民の自由と尊厳さを認めない神権国家であったことは否めない。名もない寒村を後にした若者に始まるインカ帝国は 現代の科学をもっても未だ解き明かせないほどの高度な文化を生みながら わずか100年の歴史をもって泡沫と消えた。余りにも儚いその歴史を迎えるとき そして 美しく厳しい自然に育かれた人々の純な心を想うとき 憐愍の情は尽きない。余りにも扱い領土における被征服民族の反抗 スペインの侵略 そして帝位継承をめぐる権力者の争い インカ帝国滅亡には こうしたもろもろの要因があったことを知る。しかし その最大の原因は 一体 何だったのだろうか。インカ帝国に係わる数々の記録を迎えるとき 帝位継承に係わる法律・規定が全く見当たらないことに気がつく。流れ去る歴史を実質的に後戻りすることは所詮できないことだが もし 帝位継承権が確立されていたならば マンゴ・インカがスペイン軍に走り そして 皇帝の座を夢見ることもなかったであろうし インカ帝国はかなり異なった歴史を辿ったであろう。インカ帝国は滅亡し スペイン軍は戦勝の祝盃に酔った。しかし クスコにおける権力の座に執着したアルマグロは盟友ピサロに反目し 戦の末に刑場へ引出される身となり それから3年の後 ピサロもアルマグロ派によって暗殺された。いつの世も 富と権力に執着する者の末路は哀れである。

慌ただしい調査行の一時 現地を離れる直前の短かな時間を利用して見た幾つかの遺跡は 巨石文化の素晴ら

しさと 波乱万丈の歴史を辿ったインカ帝国の怪奇と謎と悲哀をこめて 今後も多くの旅人に杖をひかせることだろう。絞首刑の跡の生々しいワヌコビエホ遺跡の神殿には 名も知れぬ薄紫色の草花がひっそりと咲き まるで死者の魂を呼び戻すかのように 激しい音を立てて雲が吹きつけていた。リマから南へ30キロメートルばかりの海岸近くに残るパチャカマ遺跡のアクヤコーナ (太陽の処女の館) の高い石壁と狭い石畳の道 そして崩れ落ちた神殿の跡は侘しい。ティアワナコをはじめとする数々の遺跡は実に素晴らしい。しかし 巨石建造物や水路が示す土木工事や 金銀細工や繊維製品が示すインカ帝国の文明には 文字を示すものは全くない。

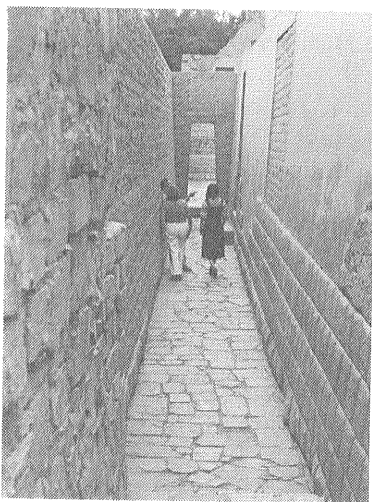
文明は文字を生み 文字は文明を榮えさせる基礎となるという固定観念が私達にはあるが 何故 驚異的な文明をもったインカは文字をもたなかったのだろうか。インカが常用した物の代表的なものの一つに キープと呼ばれるものがある。親紐に何本もの紐を垂らしただけのキープには 様々の結び目がある。元々は数字を表わす物として創作されたものらしいが 後には 記憶だけに頼ることの不確実さを補うためにも使用されたらしい。しかし いかにもインカの人々が秀れていたとしても 記憶やキープだけで記録をとどめたり意志の疎通をはかるのは困難であったにちがいない。プレインカからインカ時代までの土器には 風景や繊細・緻密に画かれた絵はなく 全く例外がないと言ってもよいほど 動



第23図 ワヌコビエホ遺跡の神殿

海拔4,000メートルの広大な沖積台地の縁にあるこの遺跡には この神殿の他に 住居 ホテル 倉庫 浴場などが残っているが墓は全く見つかっていない。「インカの遺跡に墓がなく プレインカの遺跡に住居がない」を裏付けているようである。

物・魚・植物そして様々な顔と表情の人物が線画に近い単調さで画かれている。これらの画をじっと見つめていると その画が何かを語りかけてくるように思えてくる。多くの人はこれらの画の素朴さに魅かれるというが 誰にも画けそうなこれらの画は もしかするとキープでは表現できないことを補う手段の一つとして広く画かれたのではなかろうか。



第24図 パチャカマ遺跡のアクヤコーナ (太陽の処女の館)

高い石壁と狭い石畳の道は 冷たさを感じさせる。上方が狭く下方がやや広い出入口や門は インカの建物の特徴の一つである。パチャカマはティアワナコ文化発展の一つの中心であったと見做されている。

インカ帝国は 巨石文化を継承・発展させ 土木工事に巧みな技術を駆使したものの 美術面ではこれほどの素晴らしさを残してはいない。その最大の原因は 強大な帝国の創設と保全にあったと見做することができる。

帝国の創生期 インカは遠征先でかなりの残虐行為を行って被征服民族に恐怖心を抱かせる一方 小国間の抗争・反目につけ入っては 同盟を結んでこれを援助しながら領土を拡張していったと見做されている。力による領土拡張には いつの世も こうしたことはつきまとう。殺戮・残虐行為は許されるものではないが 近代科学のメスをもっても なお解き明かせない数々の文明を創造したインカは 余りにも短命にすぎた栄華と その哀れな末路を想う時 平和を好む人々であったと信じたい。そして アマゾン川支流の湿潤地帯に「神の汗」を求め 人跡未踏の山岳地帯に多種多様の鉱物資源を求めたインカ帝国が リヤマ飼育の国営化と同様 鉱物資源の完全国有化を国家経済の基盤の一つとして事実を見るとき 苦勞の多いその鉱物資源の開発に際して 神聖視されていた山に挑む人々の悩みおののく姿が彷彿する。